

應安六年丑十一月廿八日 上道氏平 在判

文中三年 甲寅

應安七年 京都

紀元二〇三四

五月十八日。加賀守護富樫昌家、英田次郎四郎をして、能美郡長野・一針を山城石清水八幡宮の雜掌に交付せしむ。

【石清水文書】 山城

五七七

長野・一針兩村事嚴密致其沙汰、可令遵行石清水八幡宮之雜掌也。縦本主等雖支申、速退彼輩、令打渡社家之雜掌、可取進請取之狀如件。

應安七年五月十八日

(富樫) 呂家 在判

英田次郎四郎殿

十二月。僧長秀、珠洲郡高座宮別當高勝寺に、春秋時正勤行の料足を施入す。

【須須神社文書】 珠洲郡

五七八

奉施入春秋時正勤行料足事

合四石者

右梗穀施入如斯。抑桑門長秀、既雖滿懸車之齡、猶未裁輪廻之繩。依之倚思於苦海之船筏、恃意於金山之馬鞍、寄進彼本米於高勝寺之處也。然早翻少財之施與、必遂大願之本望、忽照妄想顛倒之暗夜、速屆常住不變之彼岸者哉。兼復七世四恩、同預一味平等之餽饈、三界六道共浴五智究竟之湯藥。仍施入之趣、蓋以如右。敬白。

應安七年甲寅十二月 日 大願主 僧長秀 敬

文中四年 乙卯

天授元年 五月廿七日

應安八年 京都

永和元年 二月廿七日

二月九日。左衛門尉氏信、鳳至郡總持寺塔頭法光院に田地を寄進す。

【總持寺文書】 鳳至郡

五七九

奉寄進能州鳳至郡櫛比庄諸岳山惣持寺塔頭法光院靈供

田之事

合伍段者在所

壹段 須川向

壹段 須曳濱田

壹段 安田前

壹段 田中橋爪 此内廿疇 田中前

壹段 此内五十疇 田中橋爪、自川北

右件田者、氏信之重代相傳所領也。然亡父道秀、同祖榮、

養母明惠比丘尼、檀那左衛門尉氏信崇爲後世菩提、限

永代奉寄進所實也。但百疇、臨時夫役万像公事停止之、

若於子孫中致違亂煩者、不孝爲仁、永氏信跡不可知行、

仍爲後證寄進狀如件。

應安八年二月九日

左衛門尉氏信 在判

(左衛門尉氏信は、延文三年十一月四日の條に見えたる長谷部左衛門尉氏の子なるが如し。)

二月廿四日。假掲

【傳燈餘光】

讓與能登國甘田保魚答村法華堂事

合一字者

右彼御堂、同國中之信者、並加賀國檀那之事、依爲三位御房阿闍梨一弟子、一人不殘讓渡之處實正也。然上者、設雖爲此僧圓寂背兼命、於致違亂煩之輩者、不嫌僧俗、可爲不孝之人者也。仍爲末代弘通之明鏡之讓狀如件。

應安八年乙卯二月廿四日

律師 日 乘 在判

(この文書は、羽咋郡妙成寺の開祖日乗の住持職讓狀なりといへり。然れども日乗が天授六年六月百十歳を以て化せりとの説を信ぜざる限り、この年に至るまで現住たりし不條理を思はざるべからず。殊に加賀の檀那に至るまで讓渡すべしといへるは、當年の妙成寺として有り得べき事實にあらざるべし。)

七月廿五日。長谷部正連、鳳至郡總持寺塔頭法光院に田地を沾却す。